

学 位 論 文 要 旨

研究題目

Central Serous Chorioretinopathy and Blood Serotonin Concentrations

(中心性漿液性脈絡網膜症と血中セロトニン濃度)

兵庫医科大学大学院医学研究科

医科学専攻

高次神経制御系

眼科学 (指導教授 五味 文 教授)

氏 名 木村 剛

中心性漿液性脈絡網膜症(CSC)は漿液性網膜剥離や脈絡膜肥厚をきたす脈絡膜主体の疾患である。危険因子として、ストレスやステロイドの使用などが報告されている。それらの因子に関係する視床下部-下垂体-副腎皮質(HPA)系ホルモンとCSCとの関連については一定の見解が得られていない。また、HPA系に関連するセロトニン(5-HT)との関係についての報告はわずかしかない。本研究ではCSC患者の検査所見と血中5-HTおよび各種HPA系ホルモン濃度、気分状態などのアンケート結果との関連性について検討した。2017年6月から2019年11月に兵庫医大を受診したCSC患者93例を対象とした。血中ホルモン濃度に関しては、アルドステロン、コルチゾール、副腎皮質刺激ホルモンを測定したが、特記すべき傾向はみられなかった。5-HT濃度に関しては、93例中11例(12%)が正常範囲以下であった。5-HT濃度が正常範囲以下であった症例を5-HT低値群、正常範囲内であった症例を5-HT正常群と分類し、患者要因や中心窩脈絡膜厚(SCT)などの検査所見を比較した。また、発症後6か月以内に受診した患者を急性CSC群、発症6か月以降に受診した患者、もしくは以前にCSCの既往があり、今回再発した患者を慢性CSC群と分類した。5-HT低値群と正常群を比較すると、年齢や性別、急性/慢性の分布、気分状態のスコアに差はなかったが、5-HT低値群の方が有意に精神科薬の内服例が多かった。各種ホルモン濃度にはいずれも有意差はみられなかった。検査所見ではフルオレセイン蛍光眼底造影検査にて5個以上の漏出点がある症例は5-HT低値群の方が有意に多かった。また、単変量ロジスティック回帰分析を行うと、年齢が高い、精神科薬の内服している、漏出点が5個以上、SCTが厚いということが、セロトニン濃度が正常以下であること可能性が高いという結果であった。そこで、SCTに焦点を当て、SCTに影響を及ぼす年齢と透過球面度数を調整後に、SCTに影響する因子を多変量解析で調べると、血中5-HT値が低値であるのか正常範囲内であるのかが、SCTに影響を及ぼしている可能性が示唆された。視力経過については、5-HT正常群は治療後に有意に視力改善したのにも関わらず、5-HT低値群では治療後の有意な視力改善はみられなかった。また、5-HT低値群の方が有意に治療後の再発が多く、再発した群と再発しなかった群のSCTを比較すると、再発した群の方が有意に厚かった。以上のことから、CSC患者において、血中5-HT濃度が病態や予後に関係している可能性が示唆された。